

研究指定校名 : 鳥取市立津ノ井小学校

## 1. 学校の概要

学校名	鳥取市立津ノ井小学校
学級数	14学級（うち特別支援学級：2学級）
児童生徒数	全児童数：240人（平成30年2月1日現在）
URL	<a href="http://www.torikyo.ed.jp/tunoi-e/">http://www.torikyo.ed.jp/tunoi-e/</a>

## 2. 調査研究のテーマ

### (1) 調査研究のテーマ

自らの考えを持ち、進んで学び合う子どもの育成

～「授業のユニバーサルデザイン」の視点を生かした算数科の授業づくり、集団づくり～

### (2) 調査研究のテーマを設定した背景

本校の児童の課題として、「自ら主体的に学んだり、挑戦したりする子が少ない」「自分に自信が持てない」「発表する子が限られている」といったものが挙げられる。その課題を解決するべく、人権尊重の視点に立ち、一人一人を大切にしたい授業づくりの研究に取り組んできた。中でも人権教育における指導方法の基本原則である「協力」「参加」「体験」の要素を含み、児童に自己存在感を持たせ、共感的に人間関係の育成につながる「授業のユニバーサルデザイン（以下授業UD）」を拠り所にした研究を平成25年度から4年間継続してきた（25・26年度は国語科、27・28年度は算数科）。研究の成果としては、友達との関係については9割以上の児童が肯定的な回答をし（28年度）、良好な仲間関係を育めたことや、月に一度「心のアンケート」を実施することで、日ごろから児童の人間関係を教職員が意識し、児童相互に安心感も生まれたことが挙げられる。また、全校で取り組んでいる児童会を中心とした「あいさつ運動」や「もくもく（黙々）掃除」の取組は、学級だけでなく、学校全体の協働性が向上し、支え合う仲間づくりの風土を育んだ。課題としては、さまざまなアンケートで学年差や学級差が見られることから、学級での仲間づくりを基本に、日々学習場面、生活場面での手立てを工夫していく必要がある。さらに学習場面で質の高い学びの土台となるような集団をつくるためには、どのような手立てが学習場面で必要なのかを考え、仲間づくりが学習の成果により生きるように研究を深めていくことが必要である。

平成27・28年度は「わかった・できた」を児童自身により実感させたい、学習意欲の向上をもっと図りたい、児童をより主体的に学習に向かわせたいという課題意識から、「わかった・できた」という実感を伴い、人権感覚を鋭敏にする合理的・分析的思考力の育成にもつながる算数科の研究を進めてきた。その結果、徐々に算数の授業が「好きだ」あるいは「学習内容がよく分かる」と答える児童が増えてきた。授業UDの視点に立った授業者の授業改善の意識が高まり、実際の授業場面での手立てが明確になったためと考えられる。算数の意識調査結果でも、「進んで意見を言ったり、話し合ったりしていますか」「友達のことを分かってほしいとしながら、意見や説明を聞いていますか」といった友達との関わり合いに係る肯定的な回答の割合が向上している。ペア学習やグループ学習、さらには全体での効果的な話し合いの仕方など学習中の集団づくりを意識し、学習を進めたことで、児童全員が「参加（活動する）」できる学習展開になり、児童が他者と積極的に関わろうとする意識が向上したのではないかと考えられる。しかし、児童全員「参加（活動する）」の授業の取り組みは進んだ反面、全員が「理解（分かる）」「習得（身につける）」「活用（使う）」までの育成は今一つであった。

これらを踏まえ、平成29年度も、『自らの考えを持ち、進んで学び合う子どもの育成～「授業のユニバーサルデザイン」の視点を生かした算数科の授業づくり、集団づくり～』を研究テーマとし、以下の2つを研究の柱とした。

#### (1) 授業UDの視点に立った授業づくり

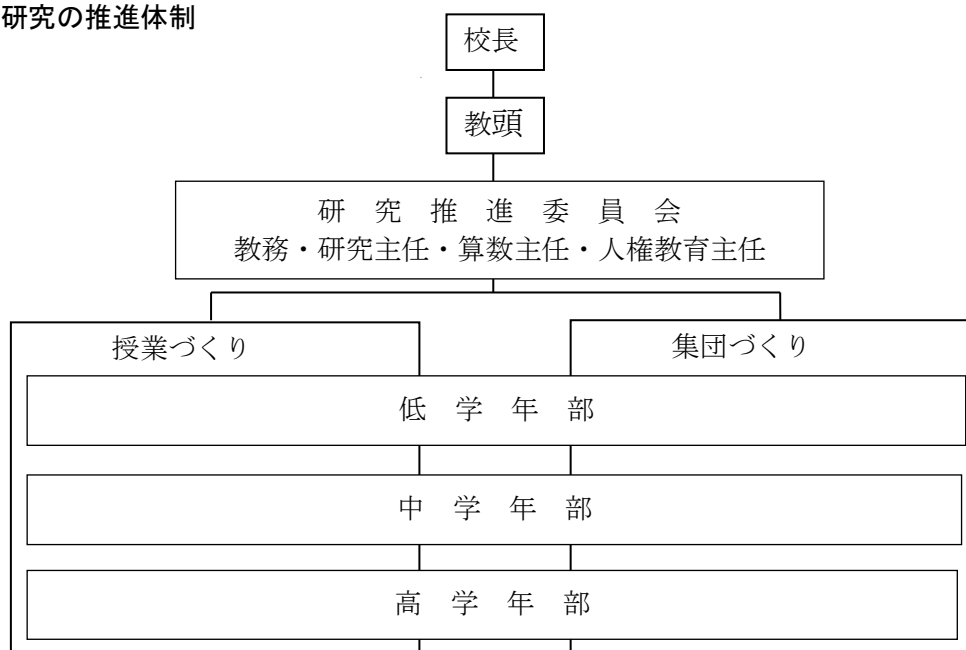
授業の焦点化、展開の構造化などの授業づくりをし、授業をUD化することで、すべての児童が主体的に参加し、学習内容を理解、習得できるようにする。

#### (2) 主体的に学び合うための集団づくり

ペア学習などで全員が発表する、グループで意見を交換するなどの学び合える場を工夫し、友達同士がよいところを認め合える場をつくる。

2つの研究の追究をとおして、児童一人一人に自己有用感を持たせ、共感的な人間関係を育成することで、自尊感情を高めるとともに、自他の違いを認め、尊重しようとする意欲や態度を育て、目標に向かって主体的に取り組む児童を育てたい。また、合理的・分析的思考力を高めることで、あらゆる場面において児童が平等な立場でお互いを信頼し、集団の目標に向かって励まし合いながら成長できる児童が育成できると考えた。

### 3. 調査研究の推進体制



〈関係協力機関〉 ○鳥取県教育委員会      ○鳥取市教育委員会

### 4. 調査研究の内容等

#### (1) 調査研究の内容・実施日程

##### 【調査研究の内容】

##### ①授業UDの視点に立った授業づくり

- 授業UDの視点（焦点化・視覚化・共有化）を意識した算数科の授業づくりの研究
  - ・児童が自ら取り組みたいと思えるようなめあての設定（アンカーの打ち込み）
  - ・意欲を持たせる導入の工夫、「しかけ」（教材の提示の仕方、発問の工夫等、学習意欲が高まるよう工夫したもの）づくり（焦点化）
  - ・解決のプロセスの共有 学び合い（ペア学習、グループ学習）の工夫（共有化）
  - ・授業の「山場」（授業展開1の後半部分で、子どもたちが「分かった」「できた」と感じるところ）を意識した授業構成（焦点化）
  - ・具体物やICT機器を活用した授業展開（視覚化）
  - ・学習内容を深め、定着を図る適用題への時間確保
  - ・知識を一般化し、言語化するためのまとめの問題の実施



ICT機器を活用し、言葉・内容・論理構成を視覚化

ペア・グループ等を活用し、考えを共有化（学び合いの工夫）





子どもが「分かった」と感じる板書の工夫を共通理解、共通実践



グループや全体の話し合いの場でのミニホワイトボードを活用

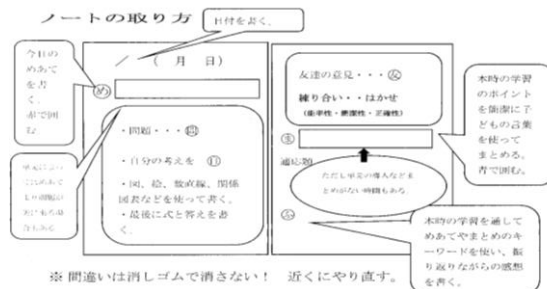


○算数科授業を支える環境づくりの研究

ノートの取り方（形式）、板書の工夫の共通理解・共通実践  
ミニホワイトボードを活用した学び合い活動の充実



授業に集中して取り組ませるために刺激量を調整



ノートの取り方（形式）

○学力向上に向けての工夫

- ・少人数指導の導入  
すっきりタイム等を活用した計算力の向上
- ・担任外作成のチャレジテストの実施
- ・算数の意識調査の実施

②主体的に学び合うための集団づくり

(主体的に学び合うために土台となる集団づくり)

○アセスや児童アンケートを活用した人間関係の把握（学級づくり）

- ・アセス（年2回）とそれに基づいた事例検討会
- ・「心のアンケート」（毎月実施）に基づいた個別面談・指導

○縦割り班活動の充実

- ・「ハッピータイム」を使っでの学級遊び、縦割り班遊び・掃除
- ・縦割り班での交流給食

○リーダー育成

- ・学級委員の設置とリーダー会議の運営

○全校統一しての取組

- ・黙想と「もくもく（黙々）掃除」・あいさつ運動

○桜ヶ丘中学校区合同の取組・・・桜咲タイム

- ・学習活動のきまりの明確化  
→話の聴き方・話し方のルール  
(うなずく・目を見て等)
- ・安全、安心で一人一人の違いを認め合える学級づくり  
→人間関係づくり
- ・今年度の桜咲タイムの内容  
アドジャン<6回>どちらを選ぶ<6回>  
いいところ見つけ<2回>



朝のあいさつ運動(児童会)



桜咲タイムの様子(どちらを選ぶ)



【実施日程】

時期	内容	備考
4月 4日	第1回研究推進会議開催（本年度の研究推進について）	参加者 8人

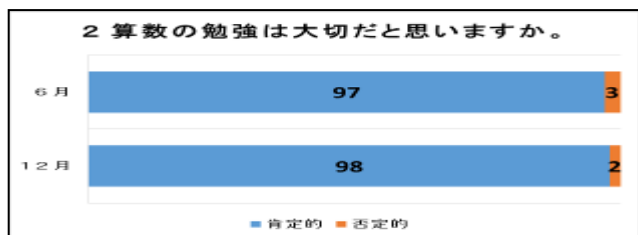
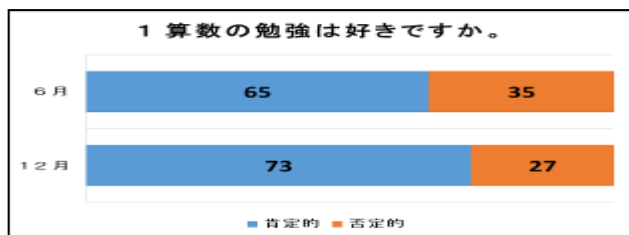
4月 5日	校内研修(本年度の研修について)	参加者 20人
4月 27日	校内研修 (アセスについて)	参加者 20人
6月 21日	第1回人権教育研究推進事業連絡協議会	参加者 1人
6月第3週	第1回「児童アンケート」「学校アンケート」等調査の実施	2～6年児童
6月 27日	第1回全体授業研究会 (2年1組) 指導助言 明星大学発達支援研究センター 京極澄子先生	参加者 28人
6月 28日	部会別授業研究会 (4年2組)	参加者 8人
7月 13日	部会別授業研究会 (5年2組 少人数学級) 2学級公開	参加者 6人
7月 19日	第2回全体授業研究会 (5年1組) 鳥取県教育委員会 平山指導主事、広富社会教育主事、 山本指導主事	参加者 24人
8月 18日	鳥取市教育委員会 中村主幹兼指導主事	
8月 19日	夏季算数研究会参加 (松江)	参加者 1人
8月 24・25日	第4回授業UDカレッジ参加 (宝塚)	参加者 2人
9月 20日	夏の教育セミナー参加 (東京)	参加者 1人
9月 22日	部会別授業研究会 (3年2組 少人数学級) 2学級公開	参加者 8人
9月 27日	部会別授業研究会 (1年2組) 第3回全体授業研究会 (3年1組) 鳥取県教育委員会 角田指導主事、広富社会教育主事、 山本指導主事	参加者 6人 参加者 24人
10月 17日	鳥取市教育委員会 中村主幹兼指導主事	
10月 27日	部会別授業研究会 (4年1組 少人数学級) 2学級公開	参加者 10人
11月 1日	部会別授業研究会 (1年1組)	参加者 6人
11月 8日	部会別授業研究会 (たんぼぼ学級)	参加者 6人
11月 28日	部会別授業研究会 (6年1組 6年2組 少人数学級) 3学級公開 小中合同授業研修会 (全学級公開) 明星大学発達支援研究センター 京極澄子先生	参加者 6人 参加者 6人 参加者 100人
12月 7・8日	鳥取県教育委員会 広富社会教育主事、山本指導主事	
12月 12日	鳥取市教育委員会 浅見主幹兼指導主事	参加者 1人
12月第2週	コミュニティースクール研修会参加 (東京)	参加者 6人
12月 20日	部会別授業研究会 (なしのみ学級)	1～6年児童
12月 27日	第2回「児童アンケート」「学校アンケート」等調査の実施	参加者 20人
1月 31日	校内研修会 (アセス事例検討会)	参加者 2人
2月中旬	道徳教育研究会参加(東京)	参加者 20人
2月 13日	校内研修会 (本年度研究の振り返り) 研究報告の印刷・配付 第2回人権教育研究推進事業連絡協議会	50冊 1人

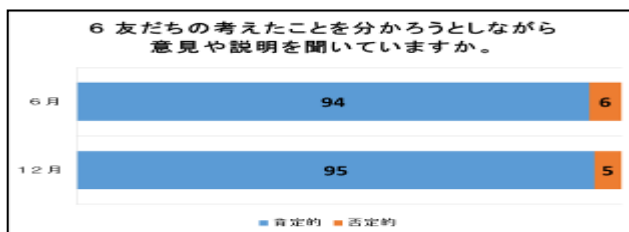
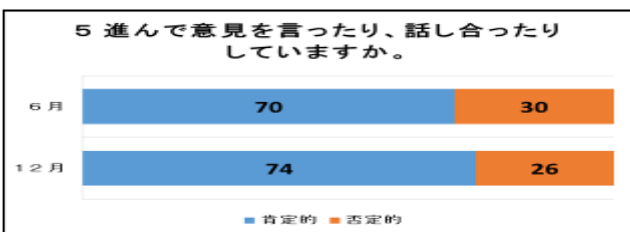
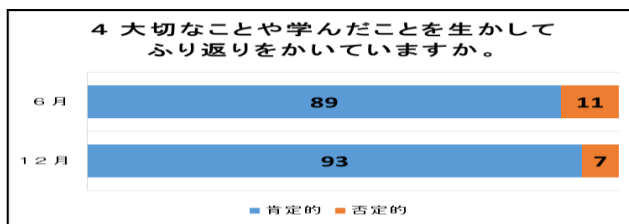
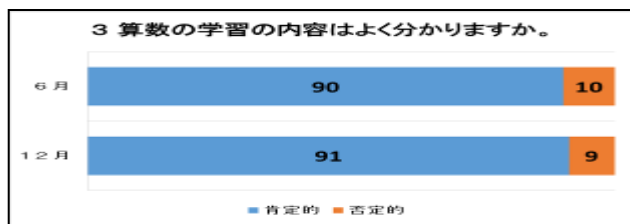
## (2) 調査研究の成果と課題

[成果]

### ①UDの視点に立った授業づくり

○算数の意識調査の結果 (%)





- ・6月に比べ12月は、算数の授業が「好きだ」あるいは「学習内容がよく分かる」と答える児童が増えている（算数の意識調査1・3を参照）。授業UDの視点に立った授業づくりで、児童が自ら「解きたい」と思えるようなめあての設定（アンカーの打ち込み）をすることが効果的だったと考えられる。また、具体物を操作するなど、課題達成のための細かなステップを設ける方法が効果的であった。
- ・本年度の一番の課題は、「授業をUD化することで、すべての児童が主体的に参加し、学習内容を理解、習得できるようにする」ことであった。昨年度は算数の学習に意欲的に取り組ませることを大切にされたため、導入に時間をかけすぎたり、話し合いの時間をとりすぎたりして、適用題の時間が十分に確保できないことがあった。本年度は授業の流れと時間の構造化を大切にされた。ボードなどに授業の流れを分かるようにし、タイマーなどを使って目標の時間を児童に提示した学年もあった。時間の目標があると時間内で話し合ったり、考えたりしながら、問題を解けるようになった。適用題やまとめの問題の時間をしっかり確保することで、基礎的な力が身につく、単元テスト、チャレンジテストなどでも得点が上昇している学年が多かった。
- ・算数の意識調査結果から「進んで意見を言ったり、話し合ったりしていますか」「友達の考えを分かってしながら、意見や説明を聞いていますか」といった友達との関わり合いに係る肯定的な回答の割合が向上している。引き続き、ペア学習やグループ学習、さらには全体の場での効果的な話し合いの仕方など学習中の集団づくりを意識し、学習を進めたことで、児童全員が「参加（活動する）」できる学習展開になり、児童が他者と積極的に関わろうとする意識が向上したのではないかと考えられる。また、友達の考えをホワイトボードや大型テレビで視覚化し、共有したことで、理解しやすくなったようである。
- ・本年度は、全体研究会で、毎回課題となることを共通理解したり、新たな授業UDの具体的な手立てに触れたりすることができ、回を追うごとに研究の深まりを感じることができた。
- ・教師及び児童の変化については次のような点が挙げられる。

#### 教師側の意識の変化

授業UDの視点を常に持つことで授業が分かりやすい流れに変わった。

教師の児童への対応の幅が広がった。

準備にたくさんの時間を割けない場合も、授業UDの視点を意識してちょっとした工夫や改善をすることができた。

「めあての提示」「板書の工夫」「話し方、聞き方」

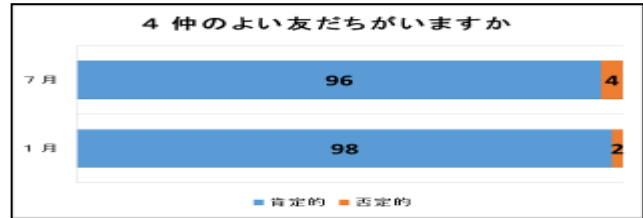
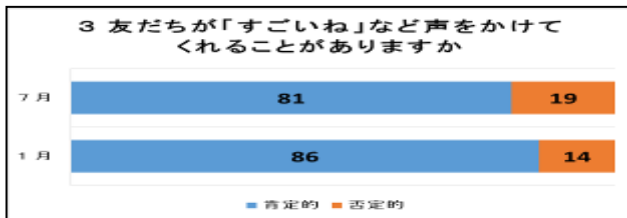
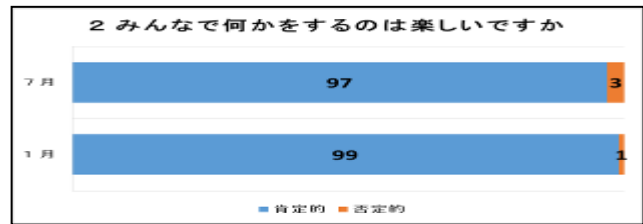
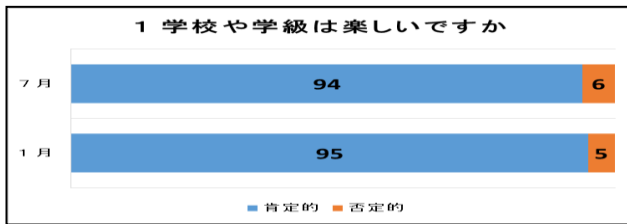
#### 児童の変化

授業内容に意識が向き、意欲や集中力が高まった。

学習内容が理解できるようになったことで、自信が持てた。

## ②主体的に学び合うための集団づくり

### ○「学校アンケート」の結果



- ・「学校は楽しいか」「みんなと何かするのは楽しいか」という問に対して、1回目も2回目も変わらず、9割以上の児童が肯定的な回答をしている（学校アンケート1・2を参照）。また「友達から『すごいね』などの声かけ」や「仲のよい友達」の間に対しては、6月に比べ少しではあるが12月は肯定的な回答が多くなっていた（学校アンケート3・4を参照）。昨年度同様、良好な人間関係がうかがえる。
- ・月に一度「心のアンケート」を実施した。このことにより児童の悩みや人間関係の問題について把握するとともに、気になる児童に対しては悩み等を聞き取るきっかけにもなった。問題が大きくなる前に教職員が対応できるだけでなく、日頃から児童の人間関係を教職員が意識したりすることにもつながった。また、そのことで児童相互の安心感も生まれたと思われる。
- ・全校で取り組んでいる児童会を中心とした「あいさつ運動」「もくもく（黙々）掃除」「廊下を少しずつ歩こう」などの取組は、学級だけでなく、学校全体の協働性が向上し、支え合う仲間づくりの風土を育てている。分かりやすく、達成しやすい目標を児童会で考えたり、具体的にどのようなあいさつや掃除がよいのか示したりするなどの工夫もみられた。
- ・毎週火曜日に「桜笑タイム」を実施した。15分という短時間の設定が児童の集中力を持続させ、次回への期待感や意欲を高めた。また、学習での話し合い活動に活用し、教科の授業におけるグループ学習やペア学習での話し合いの型として全校が共通して取り組むことができた。

### [課題]

#### ①授業UDの視点に立った授業づくり

- ・授業UDの視点にばかりに教師が気をとられてしまうと、教科の指導本来の目的が薄れてしまうこともある。常に授業のねらいを教師が大切にし、そのねらいに迫る手立てとして授業UDの視点を活用するという認識を持ち続けることが必要である。
- ・教師の誰もができる授業UDの視点に立った授業をめざしたい。具体的な手立てを共有できるような環境づくりや、教材・教具づくりを大切にしたい。

#### ②主体的に学び合うための集団づくり

- ・授業UDの視点はわかりやすさの視点である。集団づくりに授業UDの視点をよりいっそう取り入れたい。具体的には、いろいろな取組をするときに、なぜそのような取組をするのか、どこを到達点とするのかをわかりやすく子どもたちに示していきたい。そうすることで校内のきまりが明確になっていき、学び合う、落ち着いた集団づくりができると思われる。
- ・アセスなどを行い、学級の様子、児童の苦手、得意を把握し、個々の児童の思いを理解することができた。その結果から、教職員がチームを組み、「学習理解に支援が必要な子ども」の他に、「発展的な課題に取り組みたい子」にも視点をあてて、学習を進めていくことが必要であることを再確認した。